

# アフターケア

## アフターケアとは

「アフターケア」とは、犯罪に巻き込まれた後の(after)被害者に対する世話(care)のことで、心身の痛手を軽減し、早期立ち直りを図るための措置をいう。子どもが安心感を取り戻せるような環境づくりや、専門的な診療も含まれる。

犯罪被害を受けた子どもが、保護者や教師に言い出せず、1人で抱え込んでしまうケースは多い。特に、性犯罪などでは、子ども自身に被害の認識がなくて1人で混乱していたり、たとえ認識があったとしても、自分が悪いことをしたような気になって逆に怒られるのではないかと心配したりしている場合もある。そのため、保護者は普段から子どもの様子をよく見ていて、いつもと様子が違うときは、保護者の方から話をするきっかけを与えてやると、子どもも言い出しやすくなる。

### ◆事件や犯罪の被害にあった子どもにみられる反応

- ・ 事件や事故の場面が頭に浮かんで不安になる。
- ・ 悪夢を見るかもという境新から寝ることができない。
- ・ 食欲がなくなる、または増加する。
- ・ 外出をしたがらない。
- ・ 友達や他の人と関わりたいがらない。
- ・ 赤ちゃんがえり（退行）して、甘える。
- ・ 集中力が低下し、落ち着きがなくなる。
- ・ 反抗的、攻撃的になる。
- ・ できごとに関する遊びや話を繰り返す。

## 被害を受けた子どもへの対応のしかた

犯罪被害により精神的ショックを受けている子どもに対し、問い詰めて強引に聞き出そうとしたり、ヒステリックな対応をとったりすることは禁物である。無理に被害体験を聞き出すことは、子どもの「心の傷」を悪化させる恐れがある。子どもに安心感を与え、子どもが話しやすい環境をつくることが第一である。

### ◆正確に聞き出すための言葉のかけ方

起こってしまった出来事に、大人が限られた情報しか得ていない場合には、大人言葉のかけ方によって、子どもに事実と異なる報告を誘導してしまうなどの研究報告が数多くある。

子どもの話を異なった方向へ誘導する言葉のかけ方には、「Aですか」「Bではないですか」など「はい/いいえ」で答える閉ざされた質問、同じ質問をくり返すこと、質問する人が中立でない等が指摘されている。つまり、「〇〇されたの？」や「△△だったの？」といった質問のしかたをすると、実際にはそうでなくても、子どもの記憶が変わってしまう可能性がある。

子どもの話を誘導しないためには「いつ?」「だれ?」など、答えが限定されない開かれた質問（open-ended question）を用いること。質問の繰り返しをできるだけ避けること、中立の立場・受容的な態度で尋ねること、また、何より大人が感情的な揺れを子どもに見せないことが有効といえる。そして、子どもの言うことを全面的に信じる態度を示すこと、そして、子どもが悪いのではないことを、言葉や態度で伝えることも重要だと言われている。

日ごろは親や保育者に足場を組んでもらうような会話をたっぷりして、子ども自身が話すことで伝わったと思える経験を1つでも積み重ねておくことである。（「幼い子どもを犯罪から守る～命つなぐ防犯教育～」北大路書房刊より）

## 専門医の治療を受ける

子どもの体に外傷がなくても、病院へ行って診断してもらうのがよい。性犯罪の場合は、性感染症のかかっている危険性もあるので、できれば同性の医師がいる病院を選ぶ。精神的なショックが残る場合が多いので、状況に応じて心療内科を受診することも考える。

また、自分の子どもが犯罪被害にあったら、親もショックを受ける。なかなか立ち直れない場合は、被害者支援の団体に相談する。

### ●主な支援機関・団体

<http://www8.cao.go.jp/hanzai/soudan/kikan/kikan.html>